

# 「巧みさ」の陰影

『エミール』第5巻における女性の術策の問題

菅原 百合絵

ジャン＝ジャック・ルソー（1712－1778）がそのなかで理想の人間像を追究した『エミール』（1762）において、架空の生徒であるエミールは徹底して嘘<sup>1</sup>や虚偽という悪を免れた存在であるとされている。エミールは子どもの頃には嘘がどういうものであるかすら知ることがない。

だが、それほど酷な方策による必要があるどころか、エミールは嘘をつくというのがどういうことなのかをずっと後になってようやく知ることだろうし、嘘がいったい何の役に立つのか分からないので、大いに驚くことだろう<sup>2</sup>。

最終巻の終盤近くで、教師がエミールにほどこした教育を総括して述懐するときにも、嘘のなさが重要な要素として現れてくる。

---

<sup>1</sup> 嘘（mensonge）はルソー作品において枢要な概念であり、ここでそのあらゆる面を検討し尽くすことはできないが、本稿においては、この語を当時の最も一般的な語義、すなわち「騙す意図をもった、真実に反する発言（Discours avancé contre la vérité, avec dessein de tromper）」といった意味に解することにしたい。この定義はアカデミー辞典第5版の項目 MENSONGE の冒頭に置かれたものであり、同時代のほかの辞書の多くも、この語にほとんど同じ定義を与えている。Voir *Dictionnaire de L'Académie française*, quatrième édition [1762], entrée « MENSONGE ». ルソー自身、たとえば『エミール』第2巻、『孤独な散歩者の夢想』の第4の散歩などで「嘘（mensonge）」について度々考察し、定義を試みているが、この語の用法に限定して言えば、基本的には先述の定義から極度に逸脱することはない。

ルソーにおける「嘘」の問題を扱ったものとしては、たとえば以下のような文献がある。ポール・ド・マン『読むことのアレゴリー』（土田知則訳）、岩波書店、2012年、第12章「言い訳（『告白』）」、363－393頁；セルジュ・マルジェル『欺瞞について：ジャン＝ジャック・ルソー、文学の嘘と政治の虚構』堀千晶訳、水声社、2013年；桑瀬章二郎『嘘の思想家ルソー』、岩波書店、2015年。ただし、いずれも狭義の「嘘」に限って論じたものではなく、欺瞞（imposture）、虚構（fiction）、弁明（excuse）など、より広い範囲にわたる問題が考察されている。

<sup>2</sup> Jean-Jacques Rousseau, *Émile ou de l'éducation ; Œuvres complètes*, dir. Bernard Gagnebin et Marcel Raymond, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », t. IV, 1969, p. 337. 以下、ルソーの著作からの引用は指示がない限り原則的にこの版によるものとし、OCと略記したうえで巻数をローマ数字で記す。またルソーの作品については、原則として著者名は省略する。

わたしは自然の全き純朴さのうちにお前を育て、お前に骨の折れる義務について説き聞かせるかわりに、それらの義務を骨の折れるものにする悪からお前を守ってやった。嘘をおぞましいものというよりは無用なものにしてやった<sup>3</sup>。

虚飾に満ちた社交界の腐敗を知らずに育ったエミールは、正直であろうと意識せずとも嘘とは無縁であり、他人からの評価に腐心することがないため、彼にとってのありのままの真実を語り、示すことができる<sup>4</sup>。聡明だが純朴なエミールとは正反対の存在として描かれる社交界や宮廷の人々が「仮面」という否定的な表現によって特徴づけられている<sup>5</sup>ように、ルソーにとって虚偽は虚栄心や嫉妬とともに情念から生まれてくる危険な悪である。

こうした主張は、彼の著作全体から見ても納得のゆくものだと言えよう。最初の主著『学問芸術論』から一貫して、ルソーは墮落した社会が虚偽に満ちていることを告発しており、それを反転させて、真実を語ることが常にルソーにとって最重要命題のひとつであったことはよく知られている。

しかし、『エミール』第5巻では、徹底して退けられてきたはずの虚偽が、新たな光のもとに捉えなおされる。「ソフィーあるいは女性について」と題された長いテキストのなかで、エミールの来るべき伴侶ソフィーを描写しながら、ルソーはすべての嘘をひとしなみに排撃するのではなく、そこに微妙な陰影を付け加えている。彼は生得的に女性に備わっている（とされる）人を喜ばせる技巧や媚態について語りながら、女性は「嘘をついているときも偽ってはいない（« *Même en mentant, elles ne sont point fausses* »）」という一見不可解な論理を展開する。ルソーによれば、欲望を持ちながらも礼節のためにそれを表明できない彼女たちは、女性の魅力の一部をなす貞淑さを守るために偽りながら魅惑するほかない。

こうした偽りの「正当化」は、ルソーの座右の銘「真理に命を捧げる (*vitam impendere vero*)」とは到底折り合わないように見える。女性は「嘘をついているときも偽ってはいない」という主張は、何を意味するのだろうか。この

---

<sup>3</sup> *Ibid.*, p. 818.

<sup>4</sup> 「彼 [エミール] はほかの子みなどと同じように、自分を除くすべてのものに対して無関心であり、誰に対しても興味を持たない。彼が違うのは、興味を持っているように見られることを望まないということ、彼らのように不誠実ではないということだ。」 (*Ibid.*, p. 505.) 以下、大括弧 ( [ … ] ) による補足は、本文中には見出されないが、文意を分かりやすくするために本稿筆者が補ったものである。

<sup>5</sup> 「社交界の人間は完全に自分の仮面に包まれている。自分自身のうちにいることはまずないので、常によそ者のように感じ、自分自身に立ち返ることを余儀なくされると落ち着かない。」 (*Ibid.*, p. 515.)

<sup>6</sup> *Ibid.*, p. 735.

文章は、「彼女たちに固有の才能は巧みさ (adresse) であって偽り (fausseté) ではない<sup>7</sup>」という一文に続いているため、その主張は「巧みさ」と関わっているようである。しかし、女性において嘘 (mensonge) と偽り (fausseté) と巧みさ (adresse) はいかなる関係を持つのだろうか。これらについて問うことは、『エミール』において女性が真実／虚偽の問題系とどのように関わっているかを考えることでもある。

以上の問いについて検討するために、まずわたしたちはルソーと同様女性の教育について論じているフェヌロンの『女子教育論』を、古典的な女性観に基づいた作品として概観する。その分析を足がかりに『エミール』第5巻を読み直し、上に挙げた問いに答えることを試みたい。わたしたちは、「気に入られる」欲望を女性に生得的に備わったものとして(留保付きで)肯定するルソーが、フェヌロンによって退けられた狡猾さ・誘惑という2つの悪に新しい視点から光を投げかけ、そこで、真実にも虚偽にも属さない「巧みさ」の領域がひらかれるのを見ることになるだろう。巧みさは、時には嘘と区別されながらも、時には嘘に限りなく接近するものとして誘惑のテーマと結び合わされ、きわめて興味深い逆説を読者に提示してくれる。最後にわたしたちは、『エミール』第5巻が持つ語りの構造の複雑さが、女性の術策と本質的に関わり合っている可能性について検討したい<sup>8</sup>。

### 「虚栄心」の生む危険 —— フェヌロンの女性観

『エミール』第5巻で重要な役割を果たす『テレマックの冒険』の作者でもあるフェヌロンは、多くの娘を持つ父であったボーヴィリエ公爵に請われて1685年に女性の教育についての覚書を執筆し、加筆訂正して『女子教育論』として出版している<sup>9</sup>。敬虔な聖職者でもあったフェヌロンの教育論は、当時

<sup>7</sup> *Ibid.*

<sup>8</sup> ルソーにおける女性の真実／虚偽という問題については、先述の桑瀬章二郎『嘘の思想家ルソー』に示唆を受けた。とりわけ「女の嘘」と題された第6章には、「恥じらい」と「欺瞞なき嘘」についての見解などきわめて有益な見解が多く見られるが、『エミール』第5部が分析されているのは最初の一節のみであり、後半部は『新エロイーズ』のジュリの嘘の問題にあてられている。また本稿はルソーにおける女性の問題にフォーカスするものであるが、フェミニズムによるルソー批判の流れを汲むものではないということを書き添えておきたい。フェミニストによるルソー受容については、当該の研究史を簡潔にまとめた以下の論考が参考になる。Céline Spector, *Au prisme de Rousseau. Usages contemporains du rousseauisme politique*, Oxford, Voltaire Foundation, 2011, chapitre 8 : « Le prisme féministe », p. 227-261.

<sup>9</sup> Voir la notice « De l'éducation des filles », dans Fénelon, *Œuvres I*, édition établie par

の女性教育を刷新するものではなく、伝統的な論調を引き継いでそれを穩当に展開するものであった<sup>10</sup>。ルソーも読んでいたこの古典的著作<sup>11</sup>を検討し比較することは、ルソーが当時のキリスト教的道德観に深く根ざした教育論からどのように自らを差異化しているかということをより明らかにしてくれるだろう。以下では、本稿の問いに関係する範囲でごく簡単にフェヌロンの主張を検討したい。

『女子教育論』は、男女の別を問わない幼児の養育も含めて教育全般について扱っているが、専ら女子教育が焦点となる部分で重要な問題として現れるのが「虚栄 (vanité)」である。フェヌロンはキリスト教の伝統に基づき、虚栄心とそれが生み出す悪に対して強い警戒を示す。以下で見ると、この虚栄心は、「狡猾さ (finesse)」と「誘惑」という2つの問題と結びついて論じられる。

ここで狡猾さと訳した *finesse* という語は、この時代においては繊細さ、精妙さ、精神や感覚の鋭さを表すと同時に、その裏面としてのずる賢さや欺瞞、術策を示す両義的なニュアンスを帯びた表現<sup>12</sup>である。注で示したフルチエールの辞書で類語とされていたことから分かるように、この語は、ルソーが女性特有の才能だと考えた「巧みさ (adresse)」と極めて近い概念を指し示している。しかし、『女子教育論』に類出する *finesse* という語は、「狡

---

Jacques Le Brun, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1983, p. 1259-1269. 以下のフェヌロンの引用ではこの版を参照することとし、この版の頁数を表記する。

<sup>10</sup> 前注に挙げた Jacques Le Brun の解説を参照のこと。また、フェヌロンが授けようとしている「女子教育」があらゆる身分の少女のためのものではなく、ごく限られた貴族身分の子女にその対象が限定されていることは注意しなければならない。アンシャン・レژیーム期の女子教育論については多くの文献があるが、たとえば英仏の女子教育を比較しながら概観している以下を参照のこと。Martine Sonette, « Une fille à éduquer », dans *Histoire des femmes en Occident*, dir. Natalie Zemon Davis et Arlette Farge, Paris, Perrin, coll. « Tempus », t. III : *XVII<sup>e</sup>-XVIII<sup>e</sup> siècle*, 2002, p. 131-168. ソネットのこの概説においても、プーラン・ド・ラ・バルヤクロード・フルーリらの女子教育論と並んで、フェヌロンの『女子教育論』が重要文献として言及されている。

<sup>11</sup> 『エミール』第5巻でもフェヌロンに言及し、明示はしないものの『女子教育論』を参照している箇所がある。Voir *Émile ou de l'éducation*, OC, t. IV, p. 709.

<sup>12</sup> たとえばフルチエールの *Dictionnaire universel* のなかでは、*finesse* は悪い意味で使われることもあるとして、策略 (ruse) や抜け目のなさ (adresse)、詐術 (artifice) といった語が類義語に挙げられている。アカデミー辞典の初版にも策略 (ruse) や悪賢さ (astuce) が類義語に挙げられている。Voir *Dictionnaire universel, contenant généralement tous les mots françois tant vieux que modernes, et les termes de toutes les sciences et des arts*, 1<sup>re</sup> éd., 1690, entrée « FINESSE » et *Dictionnaire de L'Académie française*, 1<sup>re</sup> éd., 1694, entrée « FINESSE ». ルソーと同時代のアカデミー辞典第4版においても、ほとんど同様の定義が受け継がれている。

猾さ」としてほとんど常に否定的な意味で用いられる。特にフェヌロンは、少女が虚栄心によって本来の自分とは違う姿に見せかけることを問題視する。彼によると、彼女たちは虚栄心のために狡猾さを発揮し、もったいぶった言い方や演技<sup>13</sup>、隠し立て<sup>14</sup>をするようになるのである。

フェヌロンは、言葉巧みさや隠し立てといったものをとりわけ女性に備わった悪しき傾向として非難する。それを防ぐため、少女たちは言うべきことのみを正直に簡潔に話すようにしなければならない。真の賢明さは、上品ぶった言い回しをすることではなく、多言を弄さないことにある。さらにフェヌロンは、こうした狡猾さや術策を嘘や虚偽と区別することはない<sup>15</sup>。彼にとって、率直さと真実に反することはすべて、悪しきものとして排除や予防の対象となる。すでに見たように、フェヌロンにとって *finesse* は「繊細さ」というより、まず何よりも「狡猾さ」であった。

さらに、虚栄心は外見への配慮と結びつき、誘惑の危険をもたらす。「美しさと装いの虚しさ」と題された第10章は、その全体がこの問題の検討にあてられている。フェヌロンによると、虚栄心に満ちた存在である少女たちは、「気に入られたいというはげしい欲望」を持って生れてくる<sup>16</sup>のであり、そこから装いへの熱狂が生じる<sup>17</sup>。そして、虚栄心から来る外見上の気遣いは、男性の色欲を呼び覚ましてしまうものであるから、自らと他者を墮落させるというきわめて大きな危険<sup>18</sup>を孕んでいる。

---

<sup>13</sup> たとえば以下の箇所にもそのことが見てとれる。「もうひとつ、女性たちの長々しい駄弁に寄与しているものがある。それは彼女たちが言葉巧みに生まれついており、目的に達するために長たらしい持って回った方法をとるということである。彼女たちは巧みさ (*finesse*) を高く評価しているのだ。[...] 彼女たちはあらゆる茶番をやすやすと演じられるだけの柔軟な性質を備えており、泣いてみせるなど造作もないことである」 (Fénelon, éd. cit., p. 146)。

<sup>14</sup> 「加えて彼女たちは臆病で余計な羞恥心に満ちており、これは隠し立ての源ともなるものである。」 (*Ibid.*)

<sup>15</sup> フェヌロンは「嘘」や「嘘をつく」という語を使うことはないが、*finesse* は「装う」「あらゆる種類のお芝居を演じる」といった表現で説明される。「欺瞞」や「ごまかし」、「かつがれること」といった、騙すことに関わる表現が頻出するように、*finesse* は端的に他人を欺くものとして理解されている。

<sup>16</sup> *Ibid.*, p. 149.

<sup>17</sup> 「またそこから、彼女たちが美しさやあらゆる外見的魅力をあれほど切望し、身の装いにあれほど熱をあげるということになるのだ。ヴェール、リボンの切れ端、髪のカールが高いか低いか、どんな色を選ぶか、それが彼女たちにとってはまるで重大事といった具合なのだ。」 (*Ibid.*)

<sup>18</sup> 「少女にこんな風に言ってやることもできるだろう。あなたは、あなたとあなたの隣人の魂を、常軌を逸した虚栄心のために危険にさらしたいのですか。そうでないなら、あらわな胸やその他慎みを欠いたものを忌み嫌うようになさい。それでも、虚

つまり、キリスト教的道徳観に基づいた彼の論においては、「虚栄心」と関わって、「狡猾さ (finesse)」（あるいは「巧みさ」）は嘘とほとんど区別されることなく、真実や率直さに反するものとして少女には禁じられる。さらに、「虚栄心」は人に気に入られたいという欲望と不可分であり、その限りで、装いへの過度な配慮と結びついて、誘惑という大きな危険を伴う。

ルソーが女性やその教育について論じる際にも、虚栄心、狡猾さ、誘惑といったテーマは決定的な重要性を帯びて現れてくる。しかし、以下に見るように、ルソーはこれらの問題をフェヌロンとは対照的な光のもとに捉えなおす。

### 「巧みさ」の領域 —— 『エミール』における女性の両義性

ルソーの『エミール』は、その女性観に関してフェヌロンの『女子教育論』と多くの共通点を持つ<sup>19</sup>。しかし、両者の間には異なる点も見られる。たとえば、2人とも女性が持つ「気に入られる」ことへのこだわり可言及するものの、「彼ら [男性たち] に気に入られ、彼らの役に立ち、愛され、名誉とされること [...]、彼らの生活を快適で甘美なものにしてやること、それが生涯を通じての女性の義務であり、幼いときから彼女たちに教え込まねばならないことである<sup>20</sup>」と、「男性に気に入られる」ことを「女性の義務」に数え入れるルソーに対し、この欲求を肉欲の誘惑や墮落の危険に直結させる聖職者フェヌロンは「彼女たちは気に入られたいというはげしい欲望をもって生まれてくる<sup>21</sup>」と述べていたように、気に入られることについて少女た

---

虚栄心と人に気に入られたいという常軌を逸した欲望のほか悪しき情念がなかったところで、[虚栄心と気に入られたいという欲望を持っていたら] こうした過ちを犯してしまうかもしれません。この虚栄心は、あれほど大胆で、破廉恥で、他の人たちに悪影響を及ぼしやすい振舞いを神と人々の前で正当化するものでしょうか。人に気に入られたいというこの欲望は、造物主への愛と被造物への軽蔑から心をそらすあらゆるものを偶像崇拜と見做さなければならぬキリスト者の魂にふさわしいものでしょうか、と。」 (Ibid., p. 152.)

<sup>19</sup> たとえば、両者とも（当時のステレオタイプの女性表象を再生産しながら）女性が何事においても極端で行き過ぎに陥りやすいことを指摘する。Voir Fénelon, éd. cit., p. 157 ; *Émile ou de l'éducation*, OC, t. IV, p. 710. また、フェヌロンは女性にとっての衛生観念の重要性を（その行き過ぎを戒めつつ）主張するが、『エミール』に登場するソフィーを特徴づける性格のひとつは、欠点にもなりかねないほどの潔癖であった。Voir Fénelon, éd. cit., p. 156-157 ; Rousseau, *Émile ou de l'éducation*, OC, t. IV, p. 748.

<sup>20</sup> *Émile ou de l'éducation*, OC, t. IV, p. 703.

<sup>21</sup> Fénelon, éd. cit., p. 149.

ちが持つとされる欲求へ警戒を隠さない。フェヌロンが宗教的な問題意識のもとで示したことを、ルソーは家庭や家政という文脈に移し替え、正反対の意見を提示する。

その相違点のなかで最も際立ったもののひとつとして、真実／虚偽の問題を挙げることができるだろう。すでに見たように、フェヌロンにとって真実と率直さは何より重んじられるべきものであり、したがってそれらを少女たちに阻む虚栄心や狡猾さは根絶すべき悪であった。

『エミール』においても、この問題は随所に出現する。たとえば子どもの嘘については、義務の観念と結びついて重要な考察がなされている。第2巻で約束や取り決めについて語ろうとしながら「われわれは今や道徳的な世界に踏み入ったのであり、ここに悪への扉が開かれる。取り決めや義務とともに、ごまかしと嘘とが生まれてくる<sup>22</sup>」と言うルソーは、それに続く文章のなかで嘘を過去の事柄に関わる嘘と未来の事柄に関わる嘘に分類し、いずれの嘘も本来的には子どもにとって不自然なものとする。ルソーによると、それらは服従の義務などの外的要因から生じるものでしかない。したがって、ルソーは廉直さを子どもに強制したり、嘘を罰したりはせず、仮に子どもが嘘をついても教師による報復としてではなく、事物の秩序から自然とその嘘の弊害が引き寄せられるようにすべきだと述べる。とくにエミールについては、冒頭の引用で見たように、彼はそもそも「嘘がいったい何の役に立つのか分からない<sup>23</sup>」。また、道理の分かる年齢に達した子どもたちは、虚飾に満ちた社交界を「批判的に」見ることを学ばなければならない。「仮面」という表現のもとにそこで生きる人々の虚偽が告発されていたのは冒頭部ですで見たとおりである。

しかしルソーは、女性に関する部分ではそうした虚偽の告発とはややニュアンスの異なった論理を展開している。そのことを詳しく論じる前に、まずは『エミール』中で女性がどのように位置づけられているのかを確認しておきたい。

主人公であるエミールが男性であることから分かるように、『エミール』では専ら少年の教育が扱われている。女子教育が問題となるのは、「ソフィーあるいは女性について」と題された長大な断章を含む第5巻においてであ

<sup>22</sup> *Émile ou de l'éducation*, OC, t. IV, p. 334.

<sup>23</sup> *Ibid.*, p. 337. 子どもの嘘の問題は、すでに言及した桑瀬章二郎『嘘の思想家ルソー』でも仔細に論じられている。桑瀬もこの箇所を含む一節を引きながら、エミールという子どもが「産まれたときから常に「子供の嘘」から限りなく遠く離れたところにいる」（桑瀬章二郎、前掲書、159頁）ことを指摘している。

る。ルソーはこの第5巻の冒頭から、女性は特に「男性を喜ばせる（気に入られる）ようにできている<sup>24</sup>」と主張する。男性と違って、相対的に非力で弱い存在である女性は、男性に気に入られることによって自らの必要を充たす必然性がある。とはいえ、それは無条件に女性が男性に従属すべきであるとか、あるいはフェヌロンのように「女性の精神は概して男性より薄弱である<sup>25</sup>」というような理由からではない。ルソーにとって女性は男性よりも肉体的な腕力において劣った存在ではあるが、彼の捉える両性の関係はきわめて複雑に入り組んでいる。

両性の気質から生じる第3の結果は、より強い方が見かけ上は主でありながら、実際は弱い方に依存している、ということだ。そしてそれは、ギャラントリの浮薄な習わしによるのでもなければ、庇護者の傲慢な鷹揚さによるのでもなく、男性が欲望を満たすよりも女性が欲望を刺激するのをより容易にすることによって、男性を否が応でも女性の十分な快楽に依存させて、男性がより強い方であることを女性たちに認めてもらえるように、今度は男性に女性から気に入られるよう努めるのを余儀なくさせる自然の普遍の掟によるのである<sup>26</sup>。

強いものが弱いものを支配しながら実は弱いものに依存し、弱いものが実際には強いものを左右しているという逆説は、男女の関係によらず、『人間不平等起源論』における主人と奴隷の関係の顛倒<sup>27</sup>などにも現れるものだが、『エミール』第5巻では、男女の強さと弱さのたえざる逆転というこのキアスム的モチーフが陰に陽に提示され続ける<sup>28</sup>。「男性がより強い方であるこ

---

<sup>24</sup> *Émile ou de l'éducation*, OC, t. IV, p. 693.

<sup>25</sup> Fénelon, éd. cit., p. 91.

<sup>26</sup> *Émile ou de l'éducation*, OC, t. IV, p. 695-696.

<sup>27</sup> 「他方で、以前には人間は自由で自立していたのに、今や彼は新たな欲求の数々によって、いわば全自然に、とくに彼がその主人となりながらもある意味ではその奴隷に成り下がってしまった自らの同胞たちに支配されることとなる。富裕であれば彼らの奉仕を必要とするだろう。貧しければ彼らの助けを必要とするだろう。中間の状態でも、彼らなしで済ませられるようにはならない。」(*Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, OC, t. III, p. 174.) 男女の関係性の微妙なねじれというテーマも、すでに『不平等起源論』で示唆されている。「愛における精神性が人為的な感覚だということは容易に見て取れる。それは社会の習わしから生じ、己の支配力を築きあげ、服従すべきはずの性を支配する性にするために、女性たちによってきわめて巧みに念入りに称揚されてきたものである。」(*Ibid.*, p. 158.)

<sup>28</sup> 「しかし、品行方正で愛らしく賢明でもある妻、身内の者たちが尊敬せざるを得ないような、控えめさとつつましさを備えている妻、要するに尊敬の念が愛情の下支えをしてくれるような妻は、たったひとつの合図で、夫たちを地の果てにも、戦いにも、栄光や死にも、彼女の気に入るところに赴かせることができる。」(*Émile ou de l'éducation*, OC, t. IV, p. 745.) たとえばここで言われている、従順な妻こそが夫を



とを女性たちに認めてもらえるように、今度は男性に女性から気に入られるよう努めるのを余儀なくさせる」などというねじれた文章がすでに、男女の関係性が単なる主従の構造にはおさまらない複雑な様相を帯びていることを示唆している。一筋縄ではゆかないこの男女の関係性に留意しながら、問題の検討に入りたい。

フェヌロンの『女子教育論』と同じように、『エミール』第5巻の少女への教育においても嘘への警戒が見られる。たとえばルソーはまだ善悪の区別がつかない頃の少女にも、自分が話している相手に対して耳触りの良いこと（つまり、相手に気に入られるようなこと）しか言うてはならないという規則を課すようにしながら、「この規則の実践をさらに困難にしているのは、それが第1の、決して嘘をつかないという規則に常に従ったままであるということだ<sup>29</sup>」と述べる。少年に対するのと同じく、少女についてもまた、嘘は排除されなければならない。また女性の嘘は、それが不貞と結びついた場合には家庭を崩壊させ、男性のそれよりも遥かに深刻な結果をもたらしかねない<sup>30</sup>。したがって、女性にとっては男性以上に危険で警戒すべき嘘、強く禁じられている嘘が存在することになる。

しかしルソーは、女性については、フェヌロンのようにいつでも真実を簡潔かつ率直に言うべきだ、と主張することはしない。第5巻のなかで彼は、真実／虚偽の問題に複雑な陰影をつけながら、その領域の輪郭を繊細な手つきで浮かび上がらせてゆく。

ルソーは、母親やばあやのことが好きなら少女は彼女たちの傍らで1日仕事をしても退屈しないだろう、と述べたあとで、こう書き添える。

---

思いのままに動かすことができるという見解は、支配と服従の逆転を最も雄弁に表すもののひとつである。「女性の支配権は、優しさと巧みさと、心配りによる支配である。その命令は愛撫、その脅しは涙である」としながら、「彼女は、自分がしたいことを命令してもらうことによって、家庭においては国家における大臣のように支配しなければならない」(ibid., p. 766)と述べた一節は、この逆説を国家に当てはめて皮肉をのぞかせたものでもあるだろう。最後に、恋人ソフィーの前ではふだん勇敢なエミールが物怖じし、臆病になるということも付け加えたい。「彼は彼女の前ではおどおどして、震えんばかりになっている。もはや優しさによって心を動かそうとは望まず、あわれみによってその心をたわめようとする。」(ibid., p. 786.)

<sup>29</sup> Ibid., p. 719.

<sup>30</sup> 「もちろん誰にも[夫婦の]誓いを破ることは許されていないし、妻から女という性の峻厳な義務の唯一の褒賞を奪い去る不実な夫は、不公正で残忍な夫である。だが不実な妻はそれ以上のことをしている。彼女は家庭を崩壊させ、自然のあらゆる絆を壊してしまうのだ。夫に彼のではない子どもを与えることで、彼女はそのいずれをも裏切り、不実に裏切りを加える。」(ibid., p. 697-698.)

しかし、少女たちの本当の気持ちを判断するには、彼女たちを観察しなければいけない、彼女たちの言うことを信用してはならない。それというのも彼女たちはお辞辞を言い、本音を言わず、早いうちから自分を装うことを知っているから<sup>31</sup>。

彼にとって女性はその本質からして自分を偽る存在である<sup>32</sup>。すでに見たように、彼によれば、女性の生存は男性に気に入られることにかかっており、しかも腕力によってではなく彼らに快い存在であることによって心を捉えなければならぬのだから、率直に何もかもを示し、語るということは、女性にはそもそも許されていないということになるだろう。

策略 (ruse) は女性にとって自然な才能である。そして、自然な性向はそれ自体として良い、正しいものであると確信しているわたしは、ほかの才能と同じようにこの才能も伸ばしてやるがよいという考えだ。その濫用を防ぐということのみが問題なのである<sup>33</sup>。

彼は女性が策略に頼り、隠し立てをしやすいことを指摘しながらも、それを「自然な」才能であるとして、(一定の方向性をもって誘導しつつ)肯定し、(その「濫用」は防がなければいけないという留保を見せながらも)能力として伸ばすことを肯定する。この策略がみごとに示されるいくつかの例<sup>34</sup>のなかから、ここでは2人の恋人の板挟みになった女性の例を挙げてみたい。

当惑している人が見たければ、1人の男を、彼がその各々と密かに関係している2人の女性の間に来てさせるとよい。そして彼がどんなにばかな様子をするか観察してみるがよい。同じようにして、1人の女性を2人の男の間に来てさせてみなさい。たしかにこういう例は「男性についてより」珍しくないことだろうが。あなたは、彼女が彼らを2人とも騙してのけ、2人の各々が相手を互

---

<sup>31</sup> *Ibid.*, p. 710.

<sup>32</sup> Voir Yves Vargas, *Rousseau. L'Énigme du sexe*, Paris, PUF, 1997, p. 79-98.

<sup>33</sup> *Émile ou de l'éducation*, OC, t. IV, p. 711.

<sup>34</sup> この「策略」の例のうちに、食べ物を欲しくてもその願望を表明することを禁じられている少女が、自分の食べた料理を順番に指さして食べなかった料理に気づかせ、取りわけてもらうことに成功したという挿話がある。ルソーはこのやり口を少年のそれと比較して「この機転は女の子の策略である」(*ibid.*, p. 712)と感心しているが、フェヌロンは隠し立てや「余計な恥じらい」を防ぐために、少女たちが策略によって手に入れようとしたら好きなものを取りあげ、率直に欲しいと言ったらあげると宣言するよう勧めており (Fénelon, éd. cit., p. 148)、両者の差異がよくあらわれている。

いにあざ笑うようにするその巧みさに眼をみはることだろう。ところで、もしこの女性が彼らに同じだけの信頼感を示し、彼らに同じ気安さを見せたら、彼らはほんの一瞬でも騙されているだろうか。2人を平等に扱うことで、彼らが彼女に対して同じ権利を持っていると示してしまうことにならないだろうか。ああ！ 彼女はそれよりもどれほどずっと巧みに振る舞うことだろう！ 2人を同じように遇するどころか、彼女は2人の間に不平等を作り出してみせようとする。彼女はきわめて巧みにやっつけるので、彼女が褒めているほうは優しさによってそうされているのだと思ひこみ、手ひどくあしらわれている方は妬ましきによってそうされているのだと思ひこむ。このようにして各々が自分の分け前に満足して、彼女はいつも自分にだけ心を砕いてくれていると思うのだが、実は彼女は彼女自身にしか関心を持っていないのだ<sup>35</sup>。

ルソーがここで挙げているのは、策略が不実さを糊塗するために「濫用」されている例であるが、2人の恋人の間に挟まれた女性は、わざと彼ら2人の扱いに差をつけることによって、巧妙にそのいずれをも欺きおこせる。しかしこの女性は嘘をついているわけではない。少なくとも文章からは、彼女が何か「真実に反すること」を言っているということは読み取れない。彼女は優しくしたりつれなくしたり、といった態度によって2人に自分だけが愛されているという幻想を作り出しはするが、そこで用いられているのはあくまでも「嘘」ではなく、「巧みさ」である<sup>36</sup>。あるいは、巧みさこそが、嘘に頼らずに境地を切り抜けることを可能にしているとも言えるだろう。

さきほど、フェヌロンが *finesse* という語をほとんど常に悪い意味で用いていることを確認したが、ルソーにおいては、女性はこの *finesse* の両義性を身にまとった存在である。彼女たちは繊細、鋭敏であり、その裏返しとして不可避免的に狡猾で、巧みな策略家である。かくして、フェヌロンにとって、嘘とほとんど区別されることなく他者を欺く悪であるとされていた「狡猾さ」は、ルソーによって「嘘」や「虚偽」とは区別され、切り離されたうえで、（「濫用」されない限りにおいて）肯定されることになる。ここに「真実」にも「虚偽」にも属さない、女性の「巧みさ」によって画される曖昧な領域が現れる。

---

<sup>35</sup> *Émile ou de l'éducation*, OC, t. IV, p. 733-734.

<sup>36</sup> 引用した一節のなかで「巧みさ (*adresse*)」という語によって示されているのは、女性が男性たちに対して持つ、欺き、幻想を抱かせるというこの能力のことであるだろう。

## 逃げるガラテと脱がされるための服 —— 転倒した言語

ここまで、フェヌロンの『女子教育論』と比較しながら、『エミール』第5巻における女性の真実／虚偽の問題を検討してきた。ルソーは少女に嘘をつかないことを第1の規則として課しつつ、同時に、人を喜ばせることを言うことに大きな注意を払わせる。また、家庭を崩壊させる危険な嘘について警告しながら、彼女たちの策略を自然に備わった性向とし、それはむしろ伸ばしてやるべきだと主張する。すでに見た2人の恋人に囲まれた女性の例が雄弁に示しているように、ルソーにとっては、女性は真実／虚偽という二分的な切り分けを免れて、真実でも嘘でもない「巧みさ」の領域を生きることができ存在である。

それがなぜ可能なのかということも、ルソーは説明している。女性の策略は、彼女たちが持つ物理的な力がより少ないことに対する「きわめて公平な埋め合わせ」であって、それなしでは女性は男性の伴侶ではなく奴隷になってしまうであろう<sup>37</sup>、と彼は言う。わたしたちは、男女の間に強さと弱さのたえざる逆転があることを見てきたが、この女性の巧みさも、こうした男女の関係性に伏在する複雑さや逆転と、密接な関わりを持っている。天から与えられた策略の才能という優越性によって「彼女は彼と同等になり、彼に従いながら彼を支配する<sup>38</sup>」のだ。

ところで、本稿冒頭部で問題にした「嘘をついているときも偽ってはいない」という表現は、2人の恋人に囲まれた女性の例の記述の直後に登場する。

女性は嘘つきであると言われる。彼女たちはそうなるのだ。彼女たちに固有の才能は巧みさ(adresse)であって偽り(fausseté)ではない。女性の真の性向においては、彼女たちはたとえ嘘をついているときでも偽ってはいない。なぜあなたがたは、語らなければいけないのが彼女の口ではないときにも、口を見るのか。彼女の目を、その顔色を、その息づかいを、そのおずおずした様子を、その力のない抵抗を、見てごらんさい。それこそ、自然があなたがたに答えるため彼女らに与えた言語である。口はいつもいいえと言うし、そう言わなければならぬ。だが、彼女たちがそこに添える口調はいつも同じではないし、この口調は嘘をつくことができない。女性は、それを表明する権利は同じように持っていないくても、男性と同じ欲求を持っているのではないだろうか。たとえ正当な欲望においても、彼女が口にできない言葉と等価になる言葉を持っていないとしたら、その運命はあまりに酷にならないだろうか。彼女の恥じらいが彼女を不幸にしなければならぬのか。それを明らかにせず自らの性向を伝え

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. 712.

<sup>38</sup> *Ibid.* 強調は本稿筆者による。

る術策が彼女には必要ではないのか。自分が与えたくてたまらないもののかすめとってもらようにするには、彼女にはどれほどの巧みさ (adresse) が必要だろうか<sup>39</sup>！

ルソーはここで、女性たちの才能は巧みさであって偽りではない、と述べて一応の区別をするが、その巧みさの内実とは、口ではいいえと言いつまり欲望を否認し) ながらも、その口調、目、顔色、息づかい、おずおずした様子、力のない抵抗、などによって自らの欲望を伝えるという術策である。口がいいえと言って嘘をついていても、「自然があなたがたに答えるため彼女らに与えた言語」であるところの非言語的な要素が真実を露呈させているのだから、偽っていることにはならない、とルソーは主張しているようである。たしかに、嘘の定義とはアカデミー辞典によれば「騙す意図をもった、真実に反する発言」をすることであるから、欲望を持っているときに「いいえ」という言葉を発したなら、彼女は嘘をついているということになる。しかし、巧みさが可能にする術策、すなわち非言語的な要素が（「いいえ」という発言を裏切りながら）彼女の欲望をあらわにしてみせるなら、そこに真実が（暗黙のうちに）示されるという意味で、彼女は真実に反していない、すなわち偽ってはいない。

つまり、「嘘」が発話に関するものであり、「偽り」はより広義に、単に真実に反するものとして解される、と考えることで、この引用の意味は理解されうる。しかしルソーが伝えようとしているのは単なる語の定義による差異ではないだろう。この引用は、「巧みさ」が女性に第2の言語ワンダージュを与えていることを示している。その言語は、時には口で発話される言葉に反するメッセージを発しながら真実を語る。

わたしたちは本稿冒頭で、嘘 (mensonge) と偽り (fausseté) と巧みさ (adresse) はいかなる関係性を持つかという問いを提起したが、今までの分析はこの関係性がいかに複雑なものであるかを明らかにしてくれる。ルソーは、少女に嘘を禁じながらも、女性が本来的に自分を装って策略に頼るという性向を持つことを指摘し、一定の範囲内で「巧みさ」を肯定する。ここでは「嘘」と「偽り」から「巧みさ」が区別される。更に、ルソーは「嘘をついているときも偽ってはいない」として、「嘘」と「偽り」を分かち。しかしそれを可能にするのは「巧みさ」である。「巧みさ」は、言葉によらない言語を女性に与え、それによって女性は嘘をつきながらも偽らない（非言語的要素で真

---

<sup>39</sup> *Ibid.*, p. 735.

実を語る) ことができる。ここでは「嘘」と「巧みさ」は限りなく接近し、その境界がきわめて曖昧なものになっている。

むしろ、ルソーの主張は問題を含んだものであるだろう。たとえば女性の言動の非言語的な要素を解釈するのは常に男性側であるが、真実と虚偽を見分けるためのコードやそのために必要な配慮を彼が提示することはない。女性が天性の巧みさを濫用することをルソーは警戒するが、この曖昧さはむしろ、男性によって濫用・悪用される危険をより多く含んでいるのではないだろうか。ルソーが「彼女の目を、その顔色を、その息づかいを、そのおぼろげな様子、その力のない抵抗を、見てごらん下さい」と書いているのを見ると、そこにあらわになっている女性の劣情というファンタズムを見逃さずにいられるだろうか<sup>40</sup>。そもそも、真実と虚偽を見分けるためのこのコードは本当に存在するのだろうか。それ以前に、ここで真実と虚偽は果たして区別可能なものなのか。

しかしいずれにしても、この女性の巧みさは、「欲望」や「欲求」、「恥じらい」といった表現が示しているように、セクシュアリティの領域において嘘ともっとも接近し、真実と嘘の境界を曖昧にしながら、その巧緻の極みに達する、ということは指摘できるだろう。今まで検討してきた『エミール』第5巻からの引用の多くがこの問題に関わるものであったが、そこに「恥じらい」の要素が加わると、「巧みさ」はいわばその巧みさをいっそう増す。

ガラテの林檎とそのごちない逃走は、なんと魅力的な言葉だろう！ 彼女はそこにそれ以上の何を加え得たことだろうか。柳の木の間を縫って彼女を追いかける牧人に、逃げているのは彼を引きつけないがためにと告げたものだろうか。そうしたら彼女はいわば嘘をついたことになるだろう。というのも、

---

<sup>40</sup> クロード・アビブは、ルソーにおける女性の恥じらい (pudeur) について考察しながら、この恥じらいの持つ問題を指摘している。そこで言及されるのがモンテスキューの『ペルシャ人の手紙』である。この小説で、ユスベクの命を受けた宦官たちは恥じらいとつましみの法によってハーレムの女たちを苦しめる。ルソーが見逃していた恥じらいの抑圧的な用いられ方が1721年にすでにモンテスキューによって気づかれていたとアビブは言う。さらに、恥じらいが男性にとってきわめて大きな幻惑の領域であることも指摘される。アビブによると、ユスベクの真の悲劇は、知的で繊細なはずの彼がロクサーヌの絶望的な抵抗を恥じらいの魅力的な証と取りちがえたという「誤解」にある。この指摘は無視できないものであろう。わたしたちが見てきた第2の言語、恥じらいのコードは、男性が読解するものであり、その意味で男性によって支配されているが、その濫用と誤解の危険性をルソーは完全に無視しているように見える。Voir Claude Habib, « La pudeur et la grâce », *La Question sexuelle. Interrogations de la sexualité dans l'œuvre et la pensée de Rousseau*, Paris, Classiques Garnier, coll. « L'Europe des Lumières », 2012, p. 39-51.

そうしたら彼女はもはや彼のことを引きつけないであろうから。[...] そうだ、媚態コケツクリがその限度のうちに留められるならば、人はそれをつつましく、真実なものにするのであり、そこから貞淑さの掟を作り出せるのだ<sup>41</sup>。

ガラテは、狩人を引きつけるために、彼を誘うかわりに逃げる。ウェルギリウスの『田園詩』から採られたこのモチーフは、恥じらいと欲望の言語の妙を余すことなく伝えている。誘惑は、誘惑していることを明示するならばもはや誘惑ではなくなるのである。

ここにも、嘘と偽りと巧みさのねじれた関係を見て取ることができる。媚態は、誘惑するために逃げるという策略のうちに現れている。この巧みさは、欲するものを手に入れるために、却ってそれから遠ざかるような手段を取る、ということにある。狩人から離れようとしているという逆のメッセージを伝えてしまう点で、この振る舞いは偽りである。しかし同時に、この仕草はある意味では真実から外れたものではない。狩人は、その仕草に欺かれ、いっそう惹かれてガラテを追いかけるのだし、ガラテが望んでいたのもまさにそのことだからである。もし本当のことを言ってしまったら、「彼女はいわば嘘をついたことになるだろう」。ルソーが示すのは、真実を伝えることが嘘となり、偽ることが真実となるような、「巧みさ」の世界の逆説に満ちた言語である。先ほどの引用のなかで、弱々しい拒絶によって真実を露呈させていた非言語的な言語ラングージュは、ここでは逃げることで誘うという積極的かつ高度な技巧として結実している。

さらに、ここで問題となっているのが「誘惑」と「媚態」であることも思い起こしておきたい。フェヌロンによって、虚栄心は「誘惑」をもたらすものとして退けられていたが、ルソーはこの問題を巧みさの問題と接続しながら、女性の誘惑と媚態を新たな光のもとに捉えなおす。

ルソーもフェヌロンとともに、当世の女性を取り巻く虚飾や虚しさへの非難を隠さない。とりわけルソーは学問する女性や女性の気取りを執拗に攻撃する<sup>42</sup>。また、ルソーはフェヌロンと同様に、衣装や装飾品への過度なこだわりのことも非難している。ただ、フェヌロンにとって、本質的な美德を忘れさせ、誘惑の罪の危険性を持つ衣装や身繕いへの熱中はすべて厳しく排除すべきだったのに対して、ルソーは美への配慮を退けるべきものとはしない。

<sup>41</sup> *Émile ou de l'éducation*, OC, t. IV, p. 735.

<sup>42</sup> 女性が賢しらになることへの警戒、女性の知識欲への敵意は『エミール』第5巻の随所に見出される。たとえば宗教の観念については「少女たちの理解を超えたこと」として最低限の信仰箇条しか教えられない。Voir *ibid.*, p. 720.

ルソーは人形遊びを少女特有の遊びであるとし、彼女たちが人形の着せ替えに熱狂することを指摘したうえで、装いへの配慮を女性に生来備わったものとする<sup>43</sup>。彼にとって、女性は「気に入られる」ことを本質的に志向する存在だからである。キリスト教的世界観で物事を捉えるフェヌロンが「虚栄心」として排斥しようとしたものは、ルソーにおいて女性の本性のうちに数え入れられる。ただし彼は、少女が贅を凝らし、装身具で自分を飾り立てることは望まない。

人は、装いによって際立つことはできるけれども、その人自身によってしか気に入られることはできない。わたしたちの身繕いはわたしたち自身ではない。それはしばしば、凝りすぎることで台無しになるし、往々にして、つけている人を最も際立たせる衣装は、注目されることが最も少ない衣装だったりするのだ<sup>44</sup>。

要するにルソーは、衣装の華美さに頼る必要が少なければそれだけ美しさが証立てられるという当然の真理を示しているのだが、この記述にもどこか奇妙なところがある。女性たちは着飾れば着飾るほど恥ずべきであり、簡素な装いでいられる女性こそが自身の魅力を誇っている存在だと彼は言っているのである。

彼女が装飾品を、自分自身の魅力の補いとして、また気に入られるために自分が助けを必要としていることの暗黙の自白として見做すなら、彼女は自分の衣装を誇ることなく、むしろ謙虚になるだろう。そしてもし、普段より着飾っているときに、なんと美しい！と言われたら、悔しさに顔を赤らめることだろう<sup>45</sup>。

こうして装いの問題は、媚態とつつましさととの間に再び逆転を生み出す。気に入られるよう配慮することが女性の本質をなし、かつ、余計な飾りを必要としない簡素な装いこそが気に入られることを可能にする美の徴となるのであれば、その帰結として、装わない——ように見える——女性こそ最も気に入られることに腐心する女性だという逆説が生じてくる。その逆説を裏付けるようにして描かれるのが、エミールの伴侶となるソフィーの身繕いである。

---

<sup>43</sup> *Ibid.*, p. 706.

<sup>44</sup> *Ibid.*, p. 713.

<sup>45</sup> *Ibid.*, p. 713-714.



ソフィーは装飾品が好きで、それに精通している。[…] 彼女は自分を引き立たせて見せるのが大好きだ。けれども華美な服装は好まない。彼女の装いのうちには、つねに素朴さに優美さが合わさっているのが見られる。彼女は目立つものではなく、似合うものが好きなのだ。[…] 彼女ほど、凝った服装をしていないように見えるが、そのじつこれほど洗練された身繕いをしているお嬢さんもない。衣装のどの部分として偶然に選ばれたものはないのだが、技巧はそれらのいずれにも現れることがない。彼女の衣装は見た目はとてもつつましいが、じつはとてもおしゃれである。色香を振りまくことは全くしない。それを覆い隠している。けれども、覆い隠しながら、彼女はそれを想像させる術を知っている。彼女を見た人は言うだろう、「控えめで賢明な娘さんだ」と。けれども彼女のそばにいるかぎり、目と心を彼女から離すことができず、それらを彼女の全身にさまよわせることになる。彼女のあれほど簡素な衣装は、まるでひとつひとつ想像によって脱がされるために配されているかのようだ<sup>46</sup>。

フェヌロンが「あなたとあなたの隣人の魂を、常軌を逸した虚栄心のために危険にさらし」てしまわないために、「あらわな胸やその他慎みを欠いたものを忌み嫌う」よう少女に説き聞かせることを勧めていたのを思い出そう。彼にとって魂を墮落させる危険な服とは、胸のあらわな服、すなわち肉欲に直に訴えかける服であった。

ソフィーの服は、見た目には簡素で凝った様子がなく、つつましく魅力を覆い隠す。しかしルソーによれば、ソフィーの衣装はそれゆえにこそいっそう魅力を帯びる。隠匿によって想像の魅力を花ひらかせ、技巧の現れなさという技巧によって飾られる衣装は、そのどの部分もひとつずつ想像によって脱がされるために配されるという倒錯によって、強力な性的魅惑を秘めたものとなる<sup>47</sup>。真実にも虚偽にも属しない「巧みさ」は、ルソーによって誘惑

---

<sup>46</sup> *Ibid.*, p. 746-747. 強調は本稿筆者による。

<sup>47</sup> ルソーは、『新エロイズ』のジュリの容姿を版画家に向けて描写するさい、このように記している。「優美な素朴さ、服には多少の無頓着さすら見られるが、もっと整った雰囲気よりも彼女によく似合っている。装飾品はわずかだが、つねに良い趣味にかなっている。胸はつつましい娘らしく覆われている。信心家らしくではなく」（*Appendices de Julie, ou La Nouvelle Héloïse, OC, t. II, p. 762*）。ジュリの身繕いとソフィーのその描写は語句レベルで似通っているが、ジュリの胸に注目したい。胸は覆われているものの、娘らしくであり、信心家らしくではない、と彼は書く。ここまで『エミール』第5巻を分析してきたわたしたちには、この「娘らしく」覆われているということの意味が、「想像によって脱がされるために」であると分かる。胸はあらわすぎても、信心家らしく峻厳に覆われているのであってもならず、「つつましい娘らしく」覆われていなければならない。この絶妙なバランスを可能にするのが巧みさ (*adresse/finesse*) であり技巧 (*art*) である。

と媚態の領域にまで広げられ、欲望が生み出す男女の関係を、装いをめぐる明らかな逆説にまで導く<sup>48</sup>。

ここまで書いたことを振り返っておきたい。女性は「嘘をついているときも偽ってはいない」という主張が何を意味するのか、女性において嘘 (mensonge) と偽り (fausseté) と巧みさ (adresse) はいかなる関係を持つのか、という2つの問いから出発したわたしたちは、フェヌロンの『女子教育論』における女性観を示し、それと対照させながら『エミール』第5巻を分析してきた。フェヌロンが少女を蝕む危険な悪としていた虚栄心による狡猾さと誘惑は、ルソーによって似て非なる視点から捉え直される。狡猾さについて言えば、(それを嘘と区別せず退けたフェヌロンに対して) ルソーにおいては女性の生得的な性質であるとされ、巧みさとして留保付きで肯定される。真実／虚偽という切り分けから免れたこの巧みさは、時には嘘を回避させるものとして現れることもあるだろう。しかし一方で、嘘と巧みさが区別しがたく絡みあうこともある。それは女性の欲望と誘惑をめぐる術策を契機として出現する。恥じらいが要請するつつしみは、口の言う言葉と非言語的要素の乖離に現れるように、女性を分裂させながら、彼女たちに巧みさの言語を用いることを強いる。それが「嘘をついているときも偽ってはいない」という謎めいた言葉の意味である。その領域は、逃げるガラテとソフィーの衣装という2つの具体例によって検討された。女性固有の領域を真実と虚偽の中間に出現する巧みさに置くルソーは、男女の関係の顛倒とセクシュアリティの問題をとおしてそこに様々な陰影をつけ、術策がもたらす誘惑と媚態の逆説を明らかにしている。

### 結論にかえて —— ソフィーを見透す「目」

今までフェヌロンと比較しながら検討してきた『エミール』の引用の多くは「ソフィーあるいは女性について」と題された長いテキストから採られている。ここでルソーは一般的な女性論を展開し、ついでソフィーという女性をつぶさに描写して、やがてエミールとソフィーの愛の物語を始動させる。しかし、『エミール』は多くの論者が指摘するように複雑な語りの構造を備

---

<sup>48</sup> 本稿末尾の付論を参照のこと。

えており<sup>49</sup>、地の文に登場する「わたし (je)」はエミール (とソフィー) が織りなす物語に直接参与することもあれば、物語の語り手として一步引いた立場を保持することもある。

ところで、ソフィーの衣装を「ひとつひとつ想像によって脱がされるために配されているかのよう」であると記述するのは誰なのだろうか？ それは語り手＝教師なのだろうか、それとも語り手＝著者なのだろうか？ あるいはそのいずれでもないのだろうか？ 『エミール』を読むという体験は常にこの懐疑と不可分だが、ローレンス・モールが指摘するように理論書や恋愛小説など複数のジャンルの体裁をそなえた<sup>50</sup>第5巻ではいっそうその疑問は強くなる。

物語が始まり、エミールとソフィーが初めて出会った日の翌日、ソフィーは前日よりも簡素な装いで現れる。

わたしはソフィーのほうももう少し整った格好をしているだろうと予想していた。わたしは間違っていた。[...] ソフィーは前夜よりもさらに簡素な、もっと無頓着とすらいえる装いをしている。もっとも細心の注意を払って清潔さが保たれてはいるが。わたしがこの無頓着さに媚態を見るのは、そこにわざとらしさを見出すからである。ソフィーは洗練された身繕いが意思表示になってしまふのをよく知っている。しかし彼女は、より無頓着な身繕いも別の意思表示になってしまうことは知らない<sup>51</sup>。

ソフィーがどんな格好をして現れるのか予測すらできず (あるいはできないふりをしてみせ)、しかしソフィーが現れた瞬間に彼女の身繕いの真の意味をたちどころに見抜くのは、誰なのだろうか？ なぜ「わたし」は「瞬間ごとに男性たちの心に起きていることを読み取る<sup>52</sup>」女性の代表格たるソフィーにおのれの意図を見抜かせず、逆にソフィーの心の最深部をも探ることができるのだろうか？

『エミール』第5巻を読むときに感じずにはいられない居心地の悪さは、「(女性＝ソフィーを) 見抜く目」としての「(男性である) わたし」が常に顕現しているという点である。ルソーは女性を男性には到底到達できない

---

<sup>49</sup> たとえば以下の文献を参照のこと。Laurence Mall, *Émile ou les figures de la fiction*, Oxford, Voltaire Foundation, 2002 (surtout p. 57-63 et p. 145-183) ; 坂倉裕治『ルソーの教育思想 利己的情念の問題をめぐって』、風間書房、1998年。

<sup>50</sup> Laurence Mall, *op. cit.*, p. 146.

<sup>51</sup> *Émile ou de l'éducation*, OC, t. IV, p. 778-779.

<sup>52</sup> *Ibid.*, p. 734.

ほどの鋭い観察眼の持ち主とするが、すべてを見透す「わたし」の存在はその記述を裏切ってはいないだろうか。「わたし」は語り手＝登場人物たる教師として物語に参与し、その限りで男性としてソフィーの意図を読み損ねながらも、語り手＝著者として常にソフィーの意図を見抜き、意のままに操ってみせる。

著者と登場人物（教師）のこの意図的な混同は、作品の構造的な要請のゆえでもあるのだろう。語り手が愚かで無知であれば、ソフィーの秘めやかな意図は誰にも伝わらずに終わってしまうからである。部分的にでも、語り手は全知の存在として彼女の意図を暴き、白日のもとに晒して読者に解説しなければならない。だが、それだけが理由だろうか。この要請は、女性の術策や巧みさが不可避免的に求める配慮でもあるのではないか。術策は、見抜かれてはならないが、全く知られないことも望ましくない。術策は見抜かれないことよってのみ効力を持つが、永遠に誰からも見抜かれなければ意味を持たないからである。こうした微妙な均衡を保つべく、エミールと同様ソフィーも徹底して管理され、全知の教師の監視下でのみ、誘惑や媚態の発露をゆるされる<sup>53</sup>。

ここにはおそらく「視線」というルソーにとって重要なテーマを読み取ることができる。たとえばスタロバンスキーは、遍在的で公正な目という観念が、宗務局の監視委員会の存在と結びついて、彼の生まれ育ったジュネーヴの空と不可分なものだったと指摘していた<sup>54</sup>。しかしこの「視線」は、ジュネーヴという局地性を超えて、広く（男性）作家による女性の表象の問題系にも接続されうるものだろう。フローベールがエンマではないように、ルソーもソフィーではないのだ。『エミール』刊行からわずか35年後には、コンスタンス・ド・サルムが「わたしたちのうちに起きていることは、男たちな

---

<sup>53</sup> 興味深いことに、ソフィーは教師の意図に「一度だけ」反している。「残念なことに、ソフィーはわれわれにこの名誉を許さず、悪天候のなかをやってくることを禁止した。わたしが彼女にひそかに教え込んでおいた規則に彼女が逆らったのは、これが唯一のことだ。」(Ibid., p. 803.) ソフィーを支配する全能の教師＝語り手を裏切るこのソフィーの「反逆」は、(ソフィーと教師の結託を示唆しつつも)『エミール』というテキストの重層的な性質を垣間見させるものである。

<sup>54</sup> Jean Starobinski, *La Relation critique*, Paris, Gallimard, coll. « Le Chemin », 1970, p. 100. ルソーにおける視線の問題については、たとえばほかに以下を参照。Jean Mouton, « J.-J. Rousseau : L'absorption dans l'indéfini », dans *Les Intermittences du regard chez l'écrivain : La Bruyère, J.J. Rousseau, Stendhal, Marcel Proust, André Gide, Paul Claudel*, Paris, Desclée De Brouwer, 1973, p. 55-91.

どには判断できない<sup>55</sup>」と宣言し、ソフィーを見透そうとするまなごしを撥ねつけることになる。

## 付論

「18世紀フランスにおけるミソジニーとナショナリズム」と題された論文のなかで、玉田敦子はモンテスキューの『法の精神』とルソーの『エミール』を当時のフランスのミソジニー的女性批判の代表例として検討し、鋭い分析を加えている。この論考においても、ルソーが女性の装いに向ける注意が重要な要素として論じられる。少し長いが以下に引用したい。

ルソーは、読書を通じて女性が内面的な陶冶を目指すのを有害と見なす反面、お金をかけずに「こなれた」着こなしをすることによって男性を魅惑することを女性の役割とする。ルソーが求める女性のファッションはヴェルサイユで流行している華美で豪華なスタイルではない。[...] ルソーが求めるのは、単純に男性目線において魅力的とされ、なおかつ家計に経済的負担をもたらさない、男性にとって都合のよいファッションである。すなわちファッションにおいても、女性は主体的な存在ではなく、あくまでも男性を主体とし、「男性に愛される」、より直接的に言えば、男性に欲望されることを唯一の目的とした客体として存在することが求められているのである<sup>56</sup>。

ここで経済的な要素（「家計に経済的負担をもたらさない」）が指摘されているのは重要な点であろう。すでに述べたように、女性を家庭や家政という文脈で捉えるルソーにとって、女性の服装が清潔であっても贅沢ではないという指摘は、決して些細な細部ではないからである。また女性の服装が男性に「愛され」「欲望される」ことを唯一の目的とするものだという玉田の指摘も、これまで「気に入られる」配慮についての分析のなかで見てきたことと整合する。

しかしわたしたちは、一見「男性にとって都合のよいファッション」に見える、男性に気に入られるためのつつましい装いが、いかにして「彼 [男性] と同等になり、彼に従いながら彼を支配する」ための女性の「術策」である

---

<sup>55</sup> Constance de Salm, « Épître aux femmes » ; *Œuvres complètes de madame la princesse Constance de Salm. Épîtres. Discours*, Paris, Didot, 1842, p. 20. ただし、1797年の初版では、女性に呼びかける体裁で「わたしたち」の代わりに「あなたがた」となっている。

<sup>56</sup> 玉田敦子「18世紀フランスにおけるミソジニーとナショナリズム」、『一橋大学社会科学古典資料センター Study Series』No. 72、2016年、14頁。

かを検討してきた。またわたしたちは「男性に欲望されることを唯一の目的とした客体」であるかに見える女性が、いかにして身繕いをはじめとする主体的で積極的な巧緻でもって、男性をやすやすと誘惑し魅了し操るか、ということも示してきた。本稿で強調した「男女の強さと弱さのたえざる逆転」というテーマの重要性はここにある。「男性にとって都合のよい」ものように見えるときにこそ女性がその秘めた支配力をもっとも発揮する、という巧みさの逆説を捉えることによつてはじめて、女性の装いが「単純」に「男性に欲望されることを唯一の目的」とするものではないことが明らかになるのである。たしかに『エミール』においては、女性は徹底的に男性に対する相対性の相のもとで捉えられる。しかし「この相対性を、単なる服従と誘惑の義務としてのみ解釈してはならない<sup>57)</sup>」。一見固定的に見える男女の支配／被支配の関係性が、実は危うい流動的を帯びたものであり、しかも常にすでに逆転している可能性を持つことを、ソフィーの衣装をはじめとする女性の巧みさの例は隠微な形で示している。その意味で、玉田が「ここに現れているのは、女性に対する嫌悪と言うよりは、端的な恐怖ではないだろうか。ルソーにとって女性とは男性より優れた生きものであり、男性に脅威をもたらす存在と考えられるかもしれない<sup>58)</sup>」と述べているのは、正鵠を射た意見であるだろう。

また、ルソーとファッションの問題については、ジェニファー・M・ジョーンズの論考も参考になる<sup>59)</sup>。ジョーンズはこの論文のなかで、18世紀のモード系ジャーナリストや衣類商といったフランスのファッション業界人たちが、一見反モード的なルソーの言説をいかに巧みに「再パッケージ化」して具体的なトレンドへと取り込んでいったかを説得的に描いている。(女性が従事していることも少なくなかった)ファッション業界が、「家計に経済的負担をもたらさない、男性にとって都合のよいファッション」を推奨しているように見えるルソーの言説とすら共犯関係を結び、それを女性の欲望を起動させる装置として包摂してゆく過程は、本稿の論点とは別の次元で女性のポテンシャルを明らかにしていると言えるだろう。

---

<sup>57)</sup> Yves Vargas, *op. cit.*, p. 82.

<sup>58)</sup> 玉田敦子、前掲論文、16頁。

<sup>59)</sup> Jennifer M. Jones, « Repackaging Rousseau : Femininity and Fashion in Old Regime France », *French Historical Studies* (Durham), N° 18 (4), 1994, p. 939-67.